【研究論文】

幼児における社会性の発達に異年齢保育が及ぼす影響

乙部　貴幸，砂子　怜菜

【要約】本研究では，異年齢保育が社会性の発達に及ぼす影響を明らかにするために，同年齢保育・異年齢保育という保育形態間で子どもの社会性に差異がみられるかどうかについて，保育士が子どもを評価する質問紙調査により検討した．加えて，それぞれの保育形態において保育を実践している保育者が，どちらの保育形態が社会性を伸ばすと考えているかについても調べた．その結果，異年齢保育を受けている子どもの方が，いくつかの社会性の側面において高く評価されていた．また，異年齢保育を行っている保育者は，異年齢保育の方が社会性を伸ばすと考えている一方，同年齢保育を行っている保育者の回答傾向は質問項目ごとに異なっていた．

キーワード：異年齢保育，同年齢保育，社会性，幼児

1．問題の背景と目的

日本では，少子化が社会問題となって久しく，それは更に悪化の一途を辿っている．令和3年（2021）厚生労働省人口動態統計（確定数）[(1)] によると，すでに少子化が問題視され始めていた平成元年（1989）の出生数が124万人であったのに対し，元号が変わった令和元年（2019）では86万人と大幅に減少している．また，内閣府による令和3年版少子化社会対策白書[(2)] によると，2020年における日本の0～14歳の総人口に占める割合は12.0%であり，アメリカ合衆国の18.4%，中国の17.7%に対して大幅に少なく，韓国やシンガポールなどと並んで世界の主要国の中でも最小の部類に入る．すなわち，日本において子どもの数は大幅に減少しており，それは世界的に見ても深刻なものといえる．

少子化による弊害は，労働力，国内消費，年金など多岐にわたって議論されているが，教育や児童の発達に関する影響の1つとしては，子どもの社会性の育ちへの懸念がある．社会性，すなわち他者と関係を構築し，それを維持していく力は，他者とのかかわりの中で育っていくものだと考えられているが，特に年齢の近い他者とのかかわりが総体的に減少することで，その発達にも影響するというのである．内閣府は，平成16年版の少子化対策白書[(3)] において「子どもの健全な発育には，他者との十分なコミュニケーションが必要と考えられているが，核家族化の進行やきょうだいが少なくなっているために，他者とのコミュニケーションがうまくとれない子どもが増えているのではないか，という課題が生じている．」とし，「子どものいる世帯やきょうだい，子ども自体の減少は，子ども同士が，切磋琢磨し社会性を育みながら成長していくという機会を減少させ，自立した，たくましい若者へと育っていくことをより困難にする可能性がある．」と述べている．国立社会保障・人口問題研究所が2015年に行った「社会保障・人口問題基本調査（結

婚と出産に関する全国調査)」[4]では，一人っ子の家庭の割合が過去最高を記録し（表1)，完結出生児数も減少の一途をたどっており，日本の各家庭におけるきょうだい数は確実に減少している．つまり，現代の子どもは，子どもの絶対数が減ることによる地域の子ども集団の縮小と合わせて，以前に比して家庭の内外における異年齢の子どもとのかかわりが減少しているといえる．

このような状況においても，日本では旧来通りほとんどの教育・保育の場で同年齢集団による活動が主体となっており，異年齢との関わりは少ない自由時間の遊びや行事，清掃活動やクラブ活動などのオプショナルなものとなっている．つまり，「普段は」同年齢の集団の中で他者とかかわり，「たまに」異年齢とかかわる環境といえる．しかしながら，幼児期の教育・保育を行う保育園・幼稚園・こども園においては，異年齢または縦割り保育という形態もある．これは，年齢が異なる子どもたちをそれぞれ少人数ずつ合わせて1つのクラスとする編成法によるものである．これに対し，4月2日からの1年間に生まれた子どもを1つのクラスとしてまとめるという従来から現在まで主流となっている保育を同年齢または横割り保育という．坪井･山口(2005)[5]は，異年齢保育を実施する背景として，(1) 少子化によって日常場面での異年齢の関わりが減少したことで，子どもたちの社会性や仲間関係の形成にネガティブな影響を与えるのではないかという懸念に対して，これらを補うことを目的にした場合，(2) 過疎地の保育園等において，園児の減少によって年齢別保育の実施が困難になったことで，止むを得ず異年齢保育を導入した場合，(3) 子どもの社会性の発達にポジティブな影響や教育的意義を積極的に見出して実施する場合，の3つのケースがあることを指摘している．つまり，(2) を除き，異年齢保育は子どもの社会性を伸ばすことを期待されて導入されているということになる．異年齢保育がもつ教育的意義として，保育所保育指針解説（2018）[6]では，自分より年下の子どもへのいたわりや思いやりの気持ちを感じること，年上の子どもに対して活動のモデルとして憧れをもつことの2点が述べられている．広瀬・太田（2010）[7]は，実際に異年齢保育を行っている園の保育者に対してこのような教育的意義を問う質問紙調査を行ったところ，上下のかかわり，一人っ子や核家族が多い中でのかかわ

表１　夫婦の出生子ども数分布の推移

調査(調査年次)	総　数（客体数）		０人	１人	２人	３人	４人以上	完結出生児数
第７回調査（1977年）	100.0 %	(1,427)	3.0 %	11.0	57.0	23.8	5.1	2.19 人
第８回調査（1982年）	100.0	(1,429)	3.1	9.1	55.4	27.4	5.0	2.23
第９回調査（1987年）	100.0	(1,755)	2.7	9.6	57.8	25.9	3.9	2.19
第10回調査（1992年）	100.0	(1,849)	3.1	9.3	56.4	26.5	4.8	2.21
第11回調査（1997年）	100.0	(1,334)	3.7	9.8	53.6	27.9	5.0	2.21
第12回調査（2002年）	100.0	(1,257)	3.4	8.9	53.2	30.2	4.2	2.23
第13回調査（2005年）	100.0	(1,078)	5.6	11.7	56.0	22.4	4.3	2.09
第14回調査（2010年）	100.0	(1,385)	6.4	15.9	56.2	19.4	2.2	1.96
第15回調査（2015年）	**100.0**	**(1,232)**	**6.2**	**18.6**	**54.0**	**17.9**	**3.3**	**1.94**

国立社会保障・人口問題研究所（2015)「社会保障・人口問題基本調査（結婚と出産に関する全国調査)」より抜粋

りに教育的意義を感じているという回答が多かったことを報告している．反面，子ども一人ひとりへの見取り，保育展開における個に応じたかかわり，クラスでの活動の設定や全体で行うものの進め方などに難しさを感じるという回答も得られている．総じて，異年齢保育の教育的意義は高いが，その導入には困難や配慮点も多い，という認識がなされているといってよいだろう．

では，異年齢保育は実際に子どもの社会性を伸ばすのであろうか．これまでの異年齢保育に関する研究は事例を中心としたものが多かった．反面，異年齢保育の影響を実証的に示した研究は非常に少ないが，松永・郷式（2008）[8] はその1つである．彼らは，同年齢保育と異年齢保育を受けている子どもたちそれぞれに対して誤信念課題を実施し，その通過率を比較した．誤信念課題とは，心の理論とよばれる「自己や他者の心の存在や働きについての認識」が認められるかどうかを調べるための課題である．その結果，きょうだいがおらず，かつ同年齢保育を受けている子どもだけ，その他の子どもたちよりも課題通過率が低かった．つまり，異年齢交流の頻度が少ないことで心の存在やその働きについての認識という，社会性に大きく関わる能力が育ちにくくなることが示唆されたのである．この結果は，異年齢保育と社会性の関係についての重要な知見といえるが，心の理論は社会性の発達を支える基礎的な側面であり，実際に人とかかわる上で他者との関係を良好に維持しようとする親和性・共感性や，そのための具体的な行動に移すための社会的スキルといったより具体的な側面に関しては，定量的かつ一般性のある知見はまだほとんど得られていない．

そこで本研究では，親和性・共感性と社会的スキルの側面から，異年齢の交流が社会性の発達に及ぼす影響を明らかにするために，同年齢保育・異年齢保育という保育形態間に差異がみられるかどうか，差異がみられるならばそれはどのようなものかを検討することを目的とした．併せて，先述した松永・郷式（2008）のように，一人っ子において特に保育形態の影響がみられるかどうかも確認する．これらに加えて，それぞれの保育形態において保育を実践している保育者が，どちらの保育形態が社会性を伸ばすと考えているかについても検討し，子どもの社会性評価と比較することも目的とした．

2. 方　法

(1) 対象者

研究への協力に同意した認定こども園または保育園の計6園（同年齢保育4園，異年齢保育2園）における3，4，5歳児クラス担当保育者に，各自が担当する子どもの社会性について評価を依頼した．なお，同じ子どもに対して複数の保育者が重複して評価しないよう配慮を求めた．合計344名の幼児についてのデータが得られ，回答に不備のあったデータを除いた334件（同年齢保育183名，異年齢保育151名；男児173名，女児161名）のデータについて分析を行った．また，子どもの社会性評価を行った保育者に対して保育形態の有効性を問うアンケートを実施したとこ

ろ, 40名からの回答が得られ, 不備のあった回答を除いた39件のデータ（同年齢保育園所属19名, 異年齢保育園所属20名）を分析した．倫理的配慮として，研究に協力しなくとも不利益は一切ないこと，回答者および回答の対象となる子どもの個人情報は一切収集しないことを口頭による説明と書面により行い，研究への同意を得た.

(2) 調査の内容と手続き

本研究における調査は，保育者による子どもの社会性の評価と，保育者が異年齢と同年齢の保育形態のどちらがより社会性の発達に有効だと考えているかの2つから構成された．つまり，いずれの調査も回答者は保育者であった.

これまで様々な幼児の社会性を測定する尺度が開発されてきたが，本研究では1人の保育者ごとに複数の子どもについて評価してもらう必要があり，項目が多い尺度は回答する保育者へ多大な負担がかかる．そこで，本研究では社会性の各側面を一定以上カバーしつつ，項目数が少ないものとして，菅原ら（2007）[9] で用いられた協調性・共感性とコミュニケーションスキルからなる尺度を用いた. これは14の質問項目によって構成されており, 具体的な質問項目を表2に示した.

子どもの社会性を評価するアンケートは，各項目について [当てはまる，やや当てはまる，どちらともいえない，やや当てはまらない，当てはまらない] の5段階評価するものに，4つの属性（年齢クラス，性別，出生順位，きょうだい総数）の質問を加えた計18問で構成された．保育者に対して保育形態の有効性を問うアンケートでは，上記の14項目について [縦割りの方が伸びる，どちらかといえば縦割りの方が伸びる，変わらない，どちらかといえば横割りの方が伸びる，横割りの方が伸びる] の5段階評価で回答を求めた．ここでは，回答者にとっての答えやすさを考慮して「縦割り」「横割り」の用語を使用した.

表２　本研究で用いた幼児の社会性評価のための質問項目（菅原ら , 2007）

1. 遊びの中で自分の順番を待てる姿
2. グループで活動するとき、他の子どもと協力できる姿
3. お友だちが困っていること（気持ち）がわかる姿
4. お友だちと意見が合わないとき、うまく解決策を見つけられる姿
5. 自分のおもちゃをお友だちにも貸してあげて、一緒に遊べる姿
6. お友だちが困っているときに、なぐさめたり助けたりする姿
7. お友だちと協力して、仲良く遊ぶ姿
8. 自分からお友だちを遊びに誘う姿
9. 遊び仲間に入るとき、自分から「入れて」と言う姿
10. お友だちの話を終わりまで聞く姿
11. お友だちと意見が違っても、自分の意見をはっきりと言うことができる姿
12. 自分の意見が通らないとき、妥協することができる姿
13. お友だちに「ありがとう」「ごめんね」などの言葉がきちんと言える姿
14. 遊びやゲームのルールが守れる姿

3. 結　果

子どもの社会性評価について得られたデータに対し,「当てはまる」を5点,「当てはまらない」を1点として5段階に点数化し，各質問項目に対する回答の平均を保育形態ごとに図1に示した．各質問項目における異年齢と同年齢の間の平均値の差をｔ検定により個別に比較したところ,「お友だちが困っているときに，なぐさめたり助けたりする姿（t＝－2.16, p<.05）」「お友だちと協力して，仲良く遊ぶ姿（t＝－3.16, p<.05）」「自分からお友だちを遊びに誘う姿（t＝－2.41, p<.05）」「遊び仲間に入るとき，自分から「入れて」と言う姿（t＝－2.31, p<.05）」において，異年齢保育の子どもの方が統計的に有意に，より「当てはまる」と評価されていた．また，同年齢保育の子どもの方が異年齢に対して有意に当てはまるとされた質問項目はなかった．

次に，得られたデータから一人っ子のデータのみを抽出し（異年齢17名，同年齢24名），同様に整理したものを図2に示した．ｔ検定による個別比較を行ったところ,「お友だちが困っているときに，なぐさめたり助けたりする姿（t＝－2.59, p<.05）」「自分からお友だちを遊びに誘う姿（t＝－3.13, p<.05）」「遊び仲間に入るとき，自分から「入れて」と言う姿（t＝－2.88, p<.05）」において，上述の全体の結果と同様に異年齢保育の子どもの方が高かった.「お友だちと協力して，仲良く遊ぶ姿」については，一人っ子のみの比較では統計的に有意な差は見られなかった．また, ここでは「自分の意見が通らないとき, 妥協することができる姿（t＝2.04, p<.05）」において，同年齢保育の子どもの方が有意に「当てはまる」と評価されていた．その他の質問項目においては統計的に有意な違いはみられなかった．

保育者に対して，保育形態の有効性についての回答を求めたデータについて,「変わらない」を０点とし,「横割り（同年齢）の方が伸びる」を－2点,「縦割り（異年齢）の方が伸びる」を2点として5段階に点数化した．同年齢・異年齢保育所属の保育者ごとに，各質問項目に対する回答の平均を図3に示した.「変わらない」に割り当てた定数０に対して統計的に有意な差があるかどうかについてｔ検定を行ったところ，異年齢保育所属の保育者はすべての項目において有意に「異年齢保育の方が伸びる」と回答していた（質問順に，t＝7.09, t＝7.55, t＝22.58, t＝7.86, t＝8.82, t＝13.31, t＝6.57, t＝6.14, t＝6.14, t＝6.00, t＝4.72, t＝7.26, t＝5.64, t＝6.73; p<.05）．これに対し，同年齢保育の保育者は,「自分のおもちゃをお友だちにも貸してあげて，一緒に遊べる姿（t＝.19, p<.05）」「お友だちが困っているときに，なぐさめたり助けたりする姿（t＝2.91, p<.05）」について異年齢保育の方が伸びると回答したが,「お友だちと協力して, 仲良く遊ぶ姿（t＝－2.56, p<.05）」自分からお友だちを遊びに誘う姿（t＝－3.75, p<.05）」「遊び仲間に入るとき, 自分から「入れて」と言う姿（t＝－5.93, p<.05）」「お友だちと意見が違っても，自分の意見をはっきりと言うことができる姿（t＝－5.95, p<.05）」については有意に同年齢保育が伸びると回答していた．

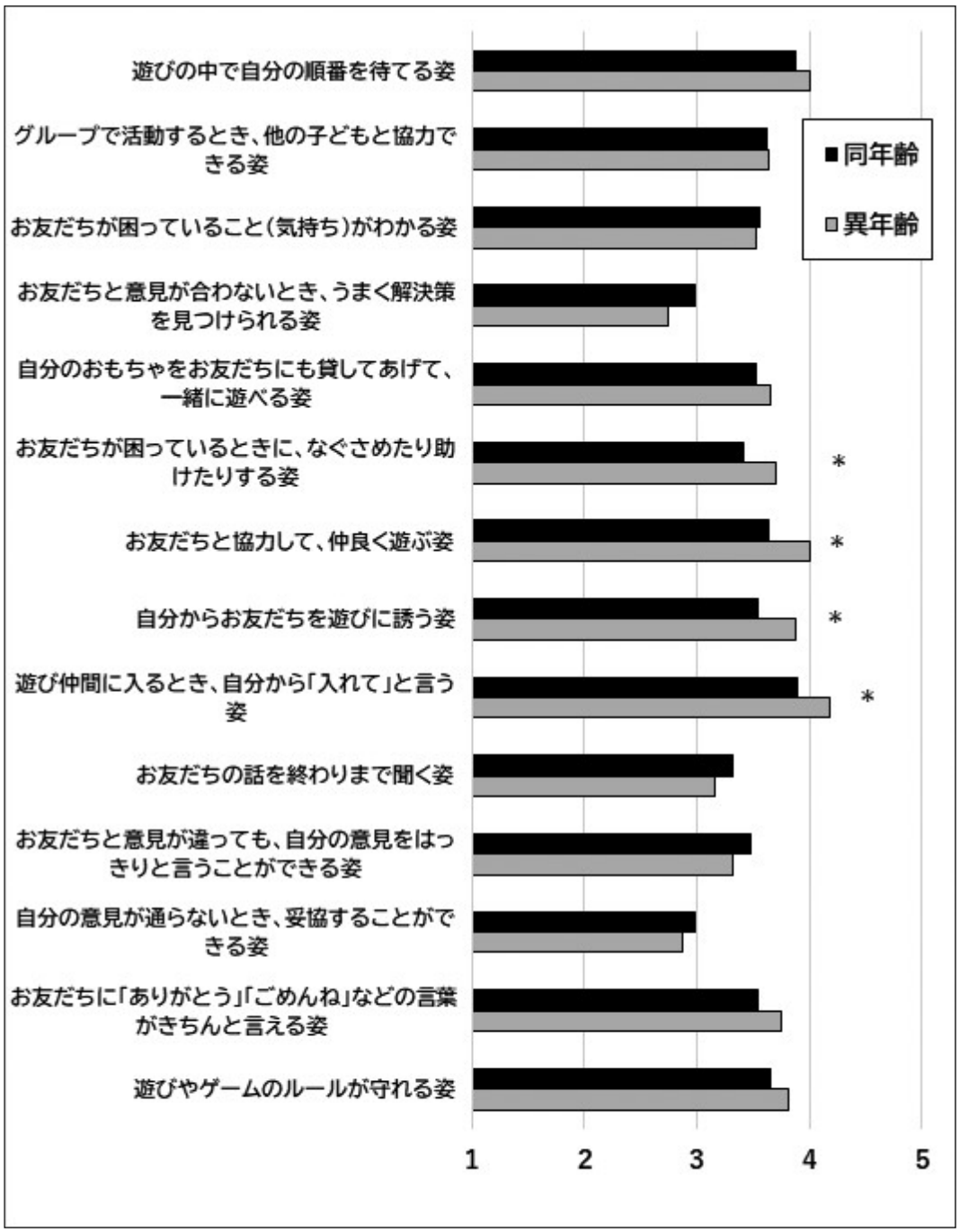

図１　同年齢・異年齢保育を受けている子どもにおける社会性に関する評価（＊：p<.05）

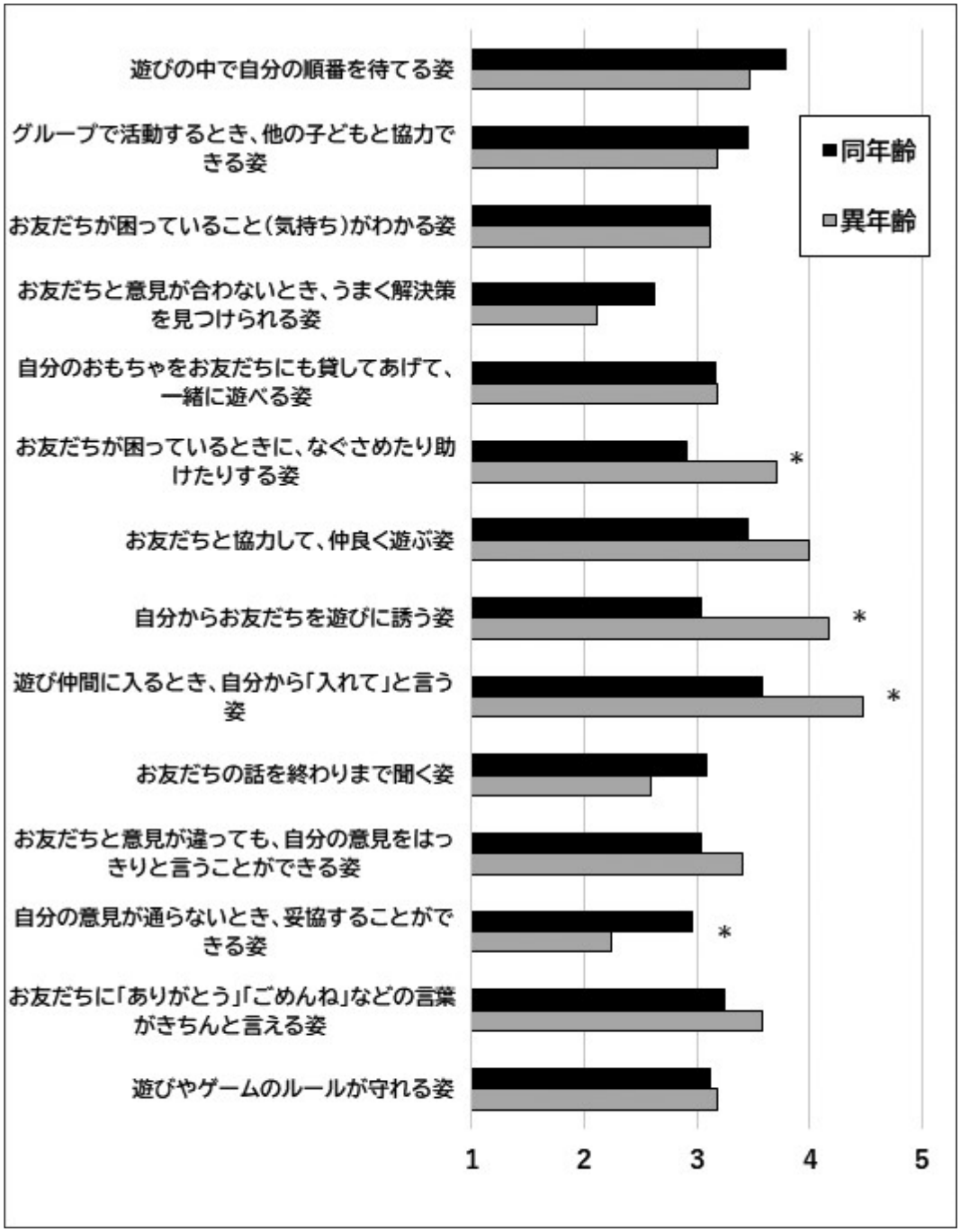

図２　同年齢・異年齢保育を受けている一人っ子における社会性に関する評価（＊:p<.05）

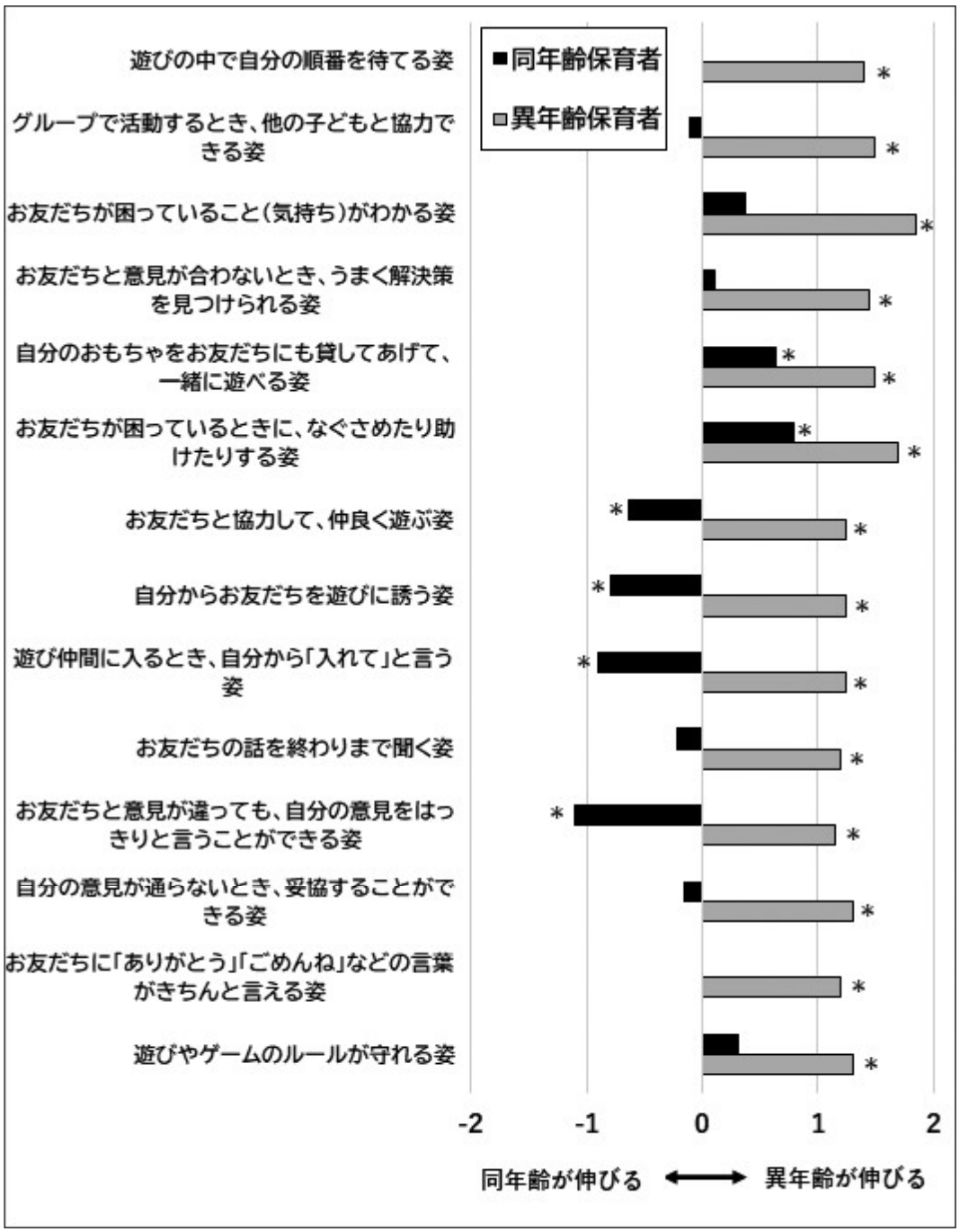

図３　同年齢・異年齢保育を行っている保育者における保育形態の評価（＊:p<.05）

4. 考　察

本研究では，異年齢交流が幼児の社会性発達に及ぼす影響を明らかにするために，異年齢保育・同年齢保育それぞれで保育を受けている幼児の社会性発達を保育者に評価してもらい，比較した．また，異年齢保育・同年齢保育に所属する保育者が，どちらの保育形態が社会性を伸ばすと考えているかについても調査した．

子どもの社会性発達の評価について，全体的にはいくつかの特徴において異年齢保育の子どもの方がより社会性が高いと評価されていた．特に，友達を慰める・助ける，遊びに誘う・入るなど，友達との接触頻度を自発的に高めようする特徴が異年齢保育の子どもにおいてよくみられるといえる．異年齢保育のクラスにおいては，基本的に年上の子どもが年下の子どもに対して積極的にお世話をする頻度が高くなり，「自発的に他者と関わる習慣」が身につきやすくなるのかもしれない．反面，対人的な粘り強さ，自己抑制など，社会性を構成する他の特徴においては保育形態による大きな違いはみられなかった．これらのことに加えて，同年齢保育を受けている子どもの方が高く評価されていた項目は1つもなかったことから，異年齢保育は全体的にみて社会性の発達に一定以上の促進効果を持つ可能性が示唆される．

次に，一人っ子のみで保育形態の差異を比較した場合は，自分の意見が通らないときに妥協することにおいて異年齢保育の子どもの方がより低く評価されていた．兄弟姉妹がいないことにより，一人っ子の家庭生活における経験不足をカバーするという意味で異年齢保育は有効だと考えられているが，実際は「少しわがまま」な側面も出てくるともいえる．しかし，このことから安易に一人っ子は異年齢保育に向かないと決めつけることはできない．この結果を別の角度から解釈すれば，一人っ子にとっては同年齢よりも異年齢の方が仲間に甘えたり，安心して自己主張したりできる人的環境であることの現れだと捉えることもできる．また，他者に対して自発的に接触しようとする傾向は一人っ子においても異年齢保育を受けている方が高く評価されており，全体的な異年齢保育の影響と共通しているといえる．

保育者における異年齢・同年齢に対する意識の調査結果から伺えるのは，まず異年齢保育を行っている園に所属している保育者は，すべての項目で異年齢保育の方が伸びると答えており，異年齢保育の方が社会性を伸ばせるという意識が非常に強いことである．これに対し，同年齢保育の保育者は，同年齢保育の方が伸びるとしたのは14項目のうち4つのみであり，さらに同年齢保育に所属しながらも異年齢保育の方が伸びるとする項目も2つあった．すなわち，同年齢保育の保育者でも異年齢保育の優位性を一部認めているということになる．さらに興味深いのは，同年齢保育の保育者が同年齢保育の方が伸びると考えたもののうち，「お友だちと協力して，仲良く遊ぶ姿」「自分からお友だちを遊びに誘う姿」「遊び仲間に入るとき，自分から「入れて」と言う姿」という質問項目は，図1に示したように子どもの社会性評価においては異年齢保育の子どもの方が高かった項目でもあるという点である．つまり，同年齢保育の保育者は，同年齢保育の方が伸

びるとした項目においても，子どもの社会性の育ちをさほど高く評価していなかったということになる．これは一体どうしてなのだろうか．1つの説明として，同年齢保育の保育者にとって同年齢保育が伸びると考えている項目だからこそ，子どもたちに対する期待値が高くなり，評価を厳しくしている可能性が考えられる．こうした保育者の意識と子どもの社会性の関連について明らかにするためには，互いの子どもを観察してそれぞれに評価をしてもらうなどの方法が必要になるだろう．

本研究の結果を全体的に総括すると，先述した松永・郷式（2008）による心の理論に関する研究[(8)]と同様に，異年齢保育の子どもの方が同年齢保育の子どもに比して，いくらかの側面において社会性が伸びている可能性が示唆されたといえる．しかし，異年齢の関わり自体がプラスの作用を持つという単純化された結論にしてしまうことには十分注意を払わなければならない．年上の子どもが年下に対して援助的に振る舞うこと，年下の子どもが年上に対して憧れを持ち模倣して学ぶことのいずれにも，そのベースとなる当人同士や媒介する保育者との人間関係が大きく影響してくることは想像に難くない．異年齢保育における人間関係と社会性にまで踏み込んだ研究はほとんどないが，子安ら（2003）[(10)]が述べるように異年齢保育はある種の「疑似きょうだい体験」であるとすると，きょうだいによる研究から様々な示唆を得ることができる．例えば，Stormshak ら（1996）[(11)]は，きょうだい同士の関係を葛藤の強さと温かさの観点から葛藤型（葛藤が強く，温もりが弱い），関与型（葛藤と温もりが中程度），支持型（葛藤が弱く，温もりが強い）の3つのグループに分けて，小学校低学年に相当する時期に学校での社会適応を調べた．その結果，きょうだいとの関係が葛藤型，つまり対立的な子どもは，そうでない子どもよりも学校適応度が低いことを報告している．また，この結果のより興味深いところとして，支持型が最も学校適応が良いわけではないことが挙げられる．きょうだいとのかかわりにおいては，程々の対立，程々の優しさといったものがあれば社会性は損なわれないといえるだろう．このことから，異年齢保育においても，むやみに仲良くさせようとせずとも，対立的な関係にならないような配慮をすることでその役割を果たせるのかもしれない．今後，異年齢保育において子どもたちが形成する人間関係にまで踏み込んで検討することで，異年齢保育と社会性の関連についての理解が大きく進むだろう．

現在の学校制度が前提としている同年齢集団による教育・保育は，戦後以降，人口増加局面にあった日本においては，1つの効率的な教育形態として機能していたのだと考えられる．しかし，現在のように人口が減少し，極端な少子化が進行する状況においても，それは効率的といえるだろうか．現実に，過疎地域ではクラスサイズの維持が難しくなった結果としての異年齢保育や複式学級化が進んでおり，必要に迫られた形での「後ろ向き」な異年齢の教育・保育が散見されるようになっている．そして最終的には統廃合となり，子どもがいない地域を生み出していく．しかもこれはここ数年という話ではない．国が少子化社会対策基本法，および次世代育成支援対策推進法を施行してから，本稿執筆時点でちょうど20年が経っているが，子どもは増えるどころ

かさらに減少しており，改善の兆しは一切みられない．川田（2019）[12]が「そのような社会になっても，我々は同年齢の子どもだけを集めた教育に意味を見いだし続けるだろうか．」と問うているように，これまで以上に異年齢集団における教育や保育を考えなければならない時代がやってくる．そのためにも，今後，異年齢集団における学びや人間関係の育ちに関する議論を支えるより多くの実証的研究が望まれる．

注：本論文は，砂子怜菜「1人っ子の社会的スキルの獲得 ―縦割り保育・横割り保育による影響はあるのか―」（令和3年度仁愛大学人間生活学部子ども教育学科卒業論文）の内容を，指導教員である乙部が全体を再構成して執筆し直したものである．本研究にご協力いただいた保育園の先生方に深謝致します．

引用文献

(1) 厚生労働省．(2021)．人口動態調査．
(2) 内閣府．(2021)．令和3年版少子化社会対策白書．
(3) 内閣府．(2004)．平成16年版少子化社会対策白書．
(4) 国立社会保障・人口問題研究所．(2015)．社会保障・人口問題基本調査（結婚と出産に関する全国調査）．
(5) 坪井敏純，& 山口郁．(2005)．異年齢保育の中の子どもたち．南九州地域科学研究所所報，21，1-10.
(6) 厚生労働省．(2018)．保育所保育指針解説．
(7) 広瀬由紀，& 太田俊己．(2010)．異年齢保育に携わる保育者の意識に関する調査研究：千葉市の保育者を対象にした質問紙調査に基づいて．植草学園大学研究紀要，2，69-76.
(8) 松永恵美，& 郷式徹．(2008)．幼児の「心の理論」の発達に対するきょうだいおよび異年齢保育の影響．発達心理学研究，19（3），316-327.
(9) 菅原ますみ，向田久美子，酒井厚，坂元章，& 一色伸夫．(2007)．子どもの社会性とメディア接触との関連．子どもに良い放送”プロジェクト フォローアップ調査中間報告 第 4 回調査報告書，NHK 放送文化研究所，60-65.
(10) 子安増生，服部敬子，& 郷式徹．(2003)．縦割り保育の幼稚園における「心の理論」および関連する能力の縦断的研究．京都大学大学院教育学研究科紀要，49，1-21.
(11) Stormshak, E. A., Bellanti, C. J., & Bierman, K. L. (1996). The quality of sibling relationships and the development of social competence and behavioral control in aggressive children. Developmental psychology, 32(1), 79.
(12) 川田学．(2019)．「異年齢」において何を見るか：発達論への展望．子ども発達臨床研究，12，55-64.